＊やりじるし お馬標・鑓標・お駕籠押の紋標（薩摩歌）

「鑓標」もとは鑓に小帛又は白熊などを附けて、一隊毎に分つて目標としたものなれど、德川時代には各大名毎に異るものを用ゐ、行列の中に立てて之を目標とした。

＊やりて やりての綱ぢや、羅生門あけてたもといふ（淀鯉）やりてが腰の鍵までも、今朝の祝儀の日明けと笑ひ賑ひののめけり（賀古教信）

〔遣手〕鈎老、鈎婦などとも書いてある。禿や遊女の躾をなし且つ監督し、又揚屋で諸事の取持をする女で、赤前垂をなし腰に鍵を吊してゐた。遣手は幅の利いた遊女の成下つた者のなつたのが多い。好色一代女（貞享三年刊）卷六、夜發付髪の條に遣手のことを記して、「薄色の前垂、中幅の帶を左の脇に結び萬の鍵を提げ、内懷より手を入れ上げて大方は黄手拭、足音無しのしのび歩行、不斷作り顔して心の外に恐しがられ、太夫引廻すこと嬶き生得をも問もなく賢くなして客の好くやうに持つて發り、際なく親方の爲によきものとなりぬ、女郎の仔細を知り過ぎて後には遣繰を見咎め、太夫もこれに恐れ客も氣の毒さに節季を待たず二角づつ、鬼に六道錢を取らるる如く思ひぬ」。好色文傳授（元祿十二年刊）卷五、一文字屋の太夫拍子の起證文の中に、「天職十五はいふに及ばず、假令局遣手飯焚までに下し候とも少しも厭はず」と見えてゐるから、遣手は局女郎や飯焚女ほどに賤しまれたものである。西鶴撰・

〔鑓の老髪結ぶり〕

後を少し引後を少し引

御前鍔狂言（寶永二年刊）卷之一、西國より上る傾城だぬの條に、「香車」に「やりて」と振假名を附けてある。異本洞房語園に、「鑓手。古來名を花車といふ、花に廻るといふ意か、然れどもくわしやと呼ては聞え惡しきとて香車と書かへたり、香車は將棊の駒の一つなれば香車と呼ばずしてやりてといひふれたり。（たいふ）「てんじん」の條の書をも見よ。）

＊やりぶすま 此處彼處垣を乘越し切破り、四方に起つて鑓ぶすま（三國志）

〔鑓襖〕鑓を數多立並べたのが襖障子の如くなるよりいふ。

＊やる 今まで立てし誓の末なんの其やらうぞ（小栗判官）

破る。日本紀に、「破」を「やる」とよみ、土佐日記に、「とまれかくまれとくやりてん」と見えてゐる。

＊やろい 駕籠やりませう上臈樣・駕籠やろいとぞ申しける（百合若）

「かごやろい」を見よ。

＊やんす 八百貫目や八千貫は誓文くつされ利なしでやんすといひければ（大經師）

「あります」の約詰である。「やす」ともいふ。現今も福山市地方では、「さうであります」を「さうぢやんす」といふ。

やんちや 關東へ往くことはいやぢやいやぢやと、やんちやばかり御意なされ（丹波與作）

小兒の我儘をいうてむつかること。小兒がむつかる時にいやんいやんと言ふ、「やんちや」は「いやんぢや」の約詰である。柳亭種彦撰・用捨箱に、「今小兒の我儘に物などいぶりなるをヤンチヤンと云」。

やんま やんま・蜻蛉・こがれ蟲（小栗判官）

〔蜻蛉〕蜻蛉の大なるもの。播守部撰・俗語考に、「蜻蛉をとんぼともやんまとも云、國によりて小なるをとんぼ・大なるをやんまといふ、やんまは八重羽の略、なべて鳥蟲の翼は二つ物なるに、此蜻蛉のみ四つある故に八重羽とはいふ也」。

ゆ

ゆうし 「いうし」を見よ。

ゆうぜんぞめ 赤い天狗に白天狗・ゆうぜんぞめの天狗達（隅田川）

「いうぜんぞめ」「友禪染」と書くが正しい。友禪染は延寶末に端を發し、貞享頃より漸次流行するに至つた。友禪染模樣の特長は、山水花卉などを巧に模樣化して瀟洒優雅の趣味に富み形態種々變つた輪廓中に草花などを配して色彩絢爛、圖樣よく消化されて技巧の妙味を發揮してゐる。友禪模樣の開祖宮崎友禪は承應三年能登深江郷に生れ、加州金澤に出で狩野守景に從つて繪事を修め、京都に上つて扇面畫を描き、更に衣裳の地の染色の上へ細密な彩畫を描くを業とし、晩年金澤に歸つて加賀染に從事したといふ。

ゆえんひげ あもとふもとの赤松を打割り松の油烟髭（薩摩歌）

〔油烟髭〕往時奴は作髭と稱して、油烟をもつていかめしう髭を描いたものである。薩摩歌「巣林子作」に、「頼に鍋墨髭人參、顰じつめたる奉公人」と見え、夕霧阿波鳴渡（巣林子作）に、「鍋釜のすみかくにもこなたの髭に入ると思ひしに所をのけて置く」、とあるも油烟髭についていうたものである。五元集拾遺に、「西瓜くふ奴の髭の流れけり」、とあるも油烟髭の流れたのをいうたのである。

＊ゆがけ 元服を祝はんと肌より弓懸を取出し（加增曾我）肌の守は母御前、弓と靱は曾我殿へ、鞭と弓懸は二の宮殿（五人兄弟）

「弓懸」和名鈔に、「韝」音攝、和名由美加介」と見えてゐる。「ゆがけ」は「ゆみかけ」の略である。革に作り弓を射るとき指に掛ける手袋の名。歩射には右弓懸ばかりをさし、騎射には一具弓懸をさしたものだといふ。

＊ゆかり いづくはあれど曾根崎の、ゆかりの芝居初樣も（繪草紙）

「よるかり」「緣詩」の義。緣。所緣。緣故。（序云、巴太鼓（滑稽璃・加賀掾正本）第二に、「いかさまこの子がゆかりか、よしゆかりにもせよゆからぬにもせよ」とあるやうに、「ゆかり」を動詞に用ゐた例もある）。「曾根崎のゆかりの芝居」とは、曾根崎に緣故ある芝居、即ちお初・徳兵衛の曾根崎心中狂言をいふ。「はつ」を見よ。

ゆぎ 引出す馬の力革ゆぎさき共にしつかと取り（加增曾我）

床木の義。居木ともいふ。鞍に關し力革を結付けるところの木（武家名目抄、興馬部所載）

興馬部に、「由木（又居木）。大坪道禪鞍鎧記云、由木の長は鞍の作樣に依て少の長短有べし、一樣に不可有、大概は一尺一分或は一尺五六厘の事也」。

***ゆきあひあね** 二歳で別れし娘なれば我等とも行合姉（國性爺）
〔行合姉〕父または母を異にする姉。父または母を異にする兄弟を行合兄弟といふ。雪女五枚羽子板に、「諸の隼太とは行合兄弟」。

***ゆぎしやう** 疑はしくば湯起請取らせ、敵に脛をとめさするな（日本武尊）
〔湯起請〕「くがだち」（探湯）ともいひ、神に誓ひ、熱湯中に手を入れさせて、爛れないのを正とし、爛れるを邪とし、それによつて眞僞を斷ずること。

ゆき・すき 大嘗會悠紀主基の御屏風を書き、（反魂香）
〔悠紀・主基〕天武紀に「齋忌次」と書いてある。大嘗會の時に祭壇を二處に設けられ、東（左方）を悠紀といひ西（右方）を主基といふ。

雪の四つ白 葦毛に雪の四つ白覆輪や（雪女）
馬の四本足の白毛なるをいふ。ここの文は四つ白に白覆輪（銀覆輪）をいひかけたのである。

ゆきひら これも主君より拜領の行平、この大小脇ばさみ物の具固め（女夫池）
〔行平〕行平作の刀をいふ。行平は長德寛弘頃大和古市に居た刀匠で、左衛門大夫と稱し、名刀鬼切を作つた人である。

***ゆきをんな** 塀の内より白鷺の飛ぶ如く、雪渦巻いて提灯に映ると齊しく女の姿、白衣白髪白妙の雪女とも謂つべし（雪女）
〔雪女〕大雪の時に陰氣凝つて怪しい女人の姿現はれるといふ、これを雪女と稱す。擅本其角の句に、「黒塚のまこともれり雪女」。谷素外編・繪本多能志美種

〔女雪〕

（刊本で寛政丙辰の序がある）にこの繪が載つてゐる。

ゆげた 但馬のゆげた數ふれば（鑑樫三）
實に湯の山の道づれと人もゆげたの數數に、戻る人あり今來るお客（百合若）
〔湯桁〕湯槽の周圍に設けてある桁。但馬のゆげた云云」はその條を見よ。

ゆごて （三國志）
〔弓籠手〕革または絹で作り、弓を射る時に弦彈きを防ぐ爲に左臂につけるもの。

***ゆさん** 身ども方へは不屆して遊山どころではあるまいぞ（曾根崎）
盡は名に負ふ遊山所の貴賤群集の伊達盡（生玉）
〔遊山〕遊山はもと山に遊ぶことで、櫻狩、茸狩、紅葉狩などを云へるが、轉じて廣く行樂遊觀の意にいふ。川遊するを船遊山といひ、原野に遊ぶを野遊山といひ、その他遊山歩き、遊山茶屋、遊山宿、遊山所などといふ。

***ゆじゆん** 鷲足山の三つの峯峨峨たる岩根を踏分けて、帝釋天の窟まで其間十由旬（釋迦）
黄金の大床波忽ちの臺の上、一由旬の鏡据ゑられたり（浦島）
〔由旬〕梵語 Yojana 距離を算する名稱である。一由旬は十六里とも三十里とも四十里ともいひ、一定してゐない。西域記に「夫數量之稱謂二踰繕那一、舊曰二由旬一、又曰二踰闍那一、又曰二由延一、皆訛略也、踰繕那者自古聖王一日軍行也、蓋傳四十里矣、印度國俗乃三十里、聖教所載唯十六里云云」。

***ゆするつき** 揚子手拭ゆするつき（孕常盤）
御櫛笥沼坏取並べ、お化粧のこと頼みます（日本武尊）
〔沼坏〕毛髪を洗ふ用水を盛る器。もとは土器であつたが、後には漆器または銀製の器を用ゐ、これを香爐の形した臺上に置く。貞丈雜記卷之八に「ゆするつきは沼坏と書く、髪水入のことなり、其形は茶碗の如し、木にて作り漆にて塗り蒔繪したるもあり、又銀にて作り毛彫をしたるもあり、蓋も茶碗の蓋の如し、髪をゆするつきと對にする、形は茶碗の臺の如し、但臺の中ゆするつきの糸尻を受くる所の穴は明通さずして底あり、又下臺別にあり、これは香爐にも用ふべき樣の形なり云云」。

ゆた お乳や乳母の癖として、背に子を負ひ寢させて置いて、いんの子いんの子とゆたもなめなかけそ（賀古教信）
「ゆつた」ともいひ、「言うた」の約訛。女殺油地獄・上卷に、「會津樣ほどいとしい人は大阪中に無いとゆつたぞよ」。七墓刻のこの文は、犬の兒と言うたも皆めかけるなの意。犬兒は能く物を皆めるから、かくいうた小守唄であつて、「な……そ」は禁止の意を示す助詞。「いんの子」はその條を見よ。

***ゆたのたゆた** 解くに解かれぬ涙の海の、ゆたのたゆたに漂ふ有樣（松風）
「ゆた」はゆつたりの意。これに擬頭語「た」を添加して「たゆた」といふ。されば「ゆた」を重ねた語であつて、ゆつたりゆつたりと搖いで、大やうに迫らぬ貌。萬葉集・卷七に、「吾心ゆたにゆたに浮きぬなは邊にも沖にも寄りがてましを」。古今集・戀歌一に、「いでわれを人なとがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ」。

***ゆたん** 犬狼の荒さぬ爲とやうやく骸を取納め、ゆたん包太刀小袖懷中まはり搔集め（持統天皇）
〔油單〕袱子。包袱。禪林象器箋に、「日本雲水僧稱二袱子一爲二油單一、其實油單以二桐油一塗紙造レ之、如二油衣之材一、以防二雨露浸犯一、蓋油單包二袱子一、故呼二袱子一爲二油單一耳」と見えてゐる。現今中國地方で風呂敷を油單といふ。

***ゆづりは** ちよつと祝ひましよ裏白讓葉（夕霧）
〔讓葉〕新年の儀に讓葉を用ゐて父子相續の義に用ゐて祝ふ。和漢三才圖會に「新葉既生舊葉落、如二父子相讓一、故俗呼曰二讓葉一、都鄙正月鏡餅及門戶之飾用、亦取二相續之義一」。

ゆどのはじめ 湯殿始に身を清め（大經師）
〔湯殿始〕舊曆上段の語。年の始に沐浴して靑陽の氣に觸るべしといふ日。ここの文は大經師に緣ある曆上の語を用ゐて文を飾つたのである。「おゆどの」をも見よ。

***ゆな** 大湯女小湯女多き中に、分けて名高き松が枝とて、元の根ざしは豐後の國濱の市の遊君なりしが（百合若）
〔湯女〕「ろしう」ともいふ。「ろしう」「ふろ」を見よ。撫津有馬の溫泉では、年長の湯女を大湯女といひ、年若い湯女を小湯女といふ。有馬小鑑抄、湯本坊舍の條に、「仁西上人溫湯再興の時十二坊舍をたて、諸國より集る湯入の次第を彼の十二坊に奉行させられしと也、かかりければ湯入のかたがた跡先を爭ひ、或は湯壺より久しく出やらぬ者ありて、とく出よなどいひ、あがりて閑靜度々に及びければ、いづれの時よりか婢女をこしらへ、湯入の支配させつつ、今に其わざ替る事なし、……古

は十二坊なりしが、時代經て國懇かに溫湯もいよいよ榮行くままに、婢女お抱ゆる坊一の湯二の湯に十坊づつ二十坊なり、婢女一坊に二人づつ都て四十人、其内に大湯女といふは或は何坊のかかと呼び、小湯女といへるは何坊のまつ・たけ・つるなど呼べり、云云」（序に云、百合若大臣野守鏡のこの文の少し前に、「土産召せ召せ、竹細工・籠も品ありま筆」とある、竹細工・籠・有馬筆などは有馬溫泉地の名物土産物である。有馬小鑑（貞享二年刊）有馬名物土産物の條に、「一、木地挽——月は木地つづみがたきやろくろつな。一、人形筆——ひょうとでて一なぐさみや人形筆。一、鐵細工——有馬鍛冶つちの拍子はとつ天下。一、竹細工——竹細工代々のちぎりか雪のはだ。一、籠細工——これ一ぢやようぬけ申籠ざいく。一、染楊枝——精氣ましきりょく有馬の染楊子。一、糸細工——こきまぜて春や柳のいとさくら」と見えてゐる）。

ゆのこ 朝がけの釜のこげ好む所ぞ、辨慶がゆのことも思はぬと（源義經）

〔湯子〕「おゆのした」ともいひ、炊ぐとき釜の底に焦げつきたる飯をいふ。焦飯。焦飯は底（そこ）着とて、人にひけを取るものとしてこれを食ふを忌む風習があつた。新板增補女重寶記、元祿十五年刊）卷之一、やまと言葉・食物の條に、「ゆのこ。おゆのした」ともいふと見え、甲子祭（天和四年刊、滑稽瑣・加賀揉正本・第三に、「湯の子とても三寶なり、行者（ぎやうじや）の身は膳病にこもひけを取りても苦しからず、いで我我が食べんとこ手づから飯匙取廻し、内侍へも義平へも我身も飽くまで食しつつ」と見え、城雕波みやげ（寶永七年刊）卷之四に、「昔もれきれきの侍・茶道坊主と口論して、坊主扇をもつて侍のあたまをたたきけれど手向せず其まま許しおかれけるこれを見し人おほくなほ何とやらすまぬ取沙汰して、まづ湯粉好（ゆのこずき）の侍とそしりけること見えてゐる。

ゆのだんこ 「やれゆのだんこ云云」を見よ。

ゆびくわはう こばれざいはひ指果報、あつたら若者を思はず討つて殘念などとは義を知つた武士のいふこと（會稽山） 其外は時の機轉出來不出來ゆびくわはう（聖德太子）

〔指果報〕人の指紋を見て果報を占ふこと。轉じて僥倖の意にいふ。

＊ゆふぎり 私は頼母様の弟子なれば能う似た處を聞かんせ、さあ三味線とゆふ霧の昔を今にひきかけて、傾城に誠なしと世の人申せども（冥途飛脚）

〔夕霧〕寛文延寶頃に於ける名妓。京都の島原から大阪に下つたのが十六歳の時であつたといふ。延寶六年正月六日病歿した。歳二十二。下寺町淨國寺に葬つた。巢林子作の三世相、夕霧阿波鳴渡などはこの名妓に就いて作つたのである。その墓は澪標に委しう載せてある。「傾城（けいせい）に誠なしと世の人云云」を見よ。

＊ゆふざれや 夕ざれや時雨まじりの初霰、御庭の梢落葉して（娥）

「夕にしあれや」の約である。（ゆふされや」といふもある。これは「夕しあれや」の約である）。

＊ゆふして なほ行末は源氏の白旗白雪の守神ぞと、木綿四手の雪を散して失せてけり（雪女）

〔木綿四手〕「しで」は「しだれ」（下垂）の義。往時は注連繩又は玉串などに木綿を垂したものである、これをゆふしでといふ。（木綿（ゆふ）」は豐後風土記に「速水郡柚富郷……此郷中楮樹多生、常取楮皮、以造二木綿一、因曰二柚富郷」と見えてゐる）。

ゆふだすき 神力を添へ給へと六社の宮に我願ひ、かけてぞ頼むゆふだすき（扇八景） 白木綿襷千早振る祝詞をこそは捧げけれ（百合若） 南無や紫大明神と、肝膽碎くゆふだすき（津戸三郎）

〔木綿襷〕木綿の襷をいふ。後世は社人の神に仕へまつるに掛けるもののみにいふ。

＊ゆふつけどり 道も長柄の敷鑓の、鞘にかかりしゆふつけ鳥。關より西にかくれなき（堀川波鼓） 只このままにお暇と、ゆふつけのとりがなく、東路さして行く道の（本領曾我）

〔木綿附鳥〕鷄の異名。顯昭の説に、世の中に騷動ある時、四境の祭といふ祓を行ひ、鷄に木綿四手（ゆふしで）を附けて、京の四境の開に放されたによつて、木綿附鳥といふた由見えてゐる。類聚名物考に、「四境の祭は天智天皇の御宇より始る、相坂、鈴鹿、立田、須磨なり、須磨の御祓は神供を海に入れ、鈴鹿にては鹿に祓を付けて放す、立田にても相坂にても白ゆふつけて〻號す、天下の凶事に祭るなり」。本領曾我に「ゆふつけのとりがなく」とあるは、「木綿附鳥」に「鳥がなく」（その條を見よ）をいひかけたのである。「ただこのままにお暇と云云」を見よ。

＊ゆふなぎ （國性籠）

〔夕凪〕海陸の溫度平均する時に風和らぐ。これを凪といひ、一日に朝夕二回あつて、朝なるを朝凪といひ、夕なるを夕凪といふ。凪は風の省畫と止とを合せた國字。

ゆみがしら お家相傳の弓頭（寄虎甲）

〔弓頭〕弓組の頭。

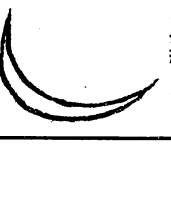
＊ゆみとり 與作も名ある弓取の家に生れし氣質とて（丹波與作） 元來ゆゆしき弓取なるが（蟬丸）

〔弓取〕往時武士は弓矢をもつて功名したればいふ。また鎗をもつて功名する世となりては鎗取ともいふた。

ゆみとりうち 南蠻金の弓鳥打を四寸ばかり白き紙にて卷きたるは（百合若）

〔弓鳥打〕鳥打又は小鳥打ともいひ、末斑（上筈ともいふ）から一尺二三寸の下方にあつて、末鳥打と大鳥打との間で、内方の弓竹に多くは節のある所の稚。平家物語・卷九、河原合戰の條に、「重藤の弓の鳥打の本を、紙をひろさ一寸ばかりにきつて左卷きに卷きたる、これぞ今日の大將軍のしるしとは見えし」。

ゆみはりづき 弓張月を金紋にすかし鹿の子の亂れ星、千葉殿の紋ぞかし（五人兄弟）



＊弓矢八幡 勘介我に奉公せば、弓矢八幡賜を持たせても堪忍する（川中島合戰）

親の敵があるといふ、弓矢八幡知らぬ事は力なし（薩摩歌）

弓矢の守護神八幡も照覽ある、今いふ詞は決して違へぬといふ意よりして自誓の詞に用ゐる。俚言集覽に、「弓矢八幡。誓言也」。

夢か七つか 「七つ」を見よ。

＊ゆめちがへ 我が夫に怪我あやま

ちの知らせの夢と、……夢ちがへしつ轉じ變へ、心も波も立騷ぎ（薩摩歌）　さぞや夢見が惡からう、明日は占ひ夢ちがへ、違へても祈りても返らぬ後の悔み言（氷朔日）

〔夢遇〕凶夢を見た時、災害の來ぬやう兇などすること。和訓栞に「袋艸帋に吉備大臣夢遇誦文の歌あり、今凶夢をさか夢などいふに同じ、あらちをのかるやのさきに立つ鹿も、ちがへをすればちがふとぞ聞く」。

ゆめどの　地名部を見よ。

***夢の浮橋**　夢の浮橋六十帖を渡り詰め（淀鯉）　夢心夢の浮橋長き夜の、唐の眠りの日の本に、覺めやらぬ間の旅衣（國性爺後日）　うれりし松に手をとりて、渡るも夢の浮橋や、無明の橋のいと細き（今宮）　お客樣お客樣と呼べども夢の浮橋や、鏁ばづしそつと入り（百合若）

源氏物語中の卷（帖）名。また夢のことにいひ、轉じて熟睡の意にもいふ。玉勝間卷六に、「夢の浮橋といふは、古き歌に、世の中は夢のわたりのうきはしかうち渡しつつ物をこそ思へ、とあるより出でたることにて、……、吉野川にある夢の和多といふ名所にて、そこに渡せる浮橋なり、……、吉野の名所なるを源氏物語に、卷の名とせるは夢のことにとれるなり、……、後にはひたすら夢のこととなれり」。淀鯉出世瀧德のここの文に、「六十帖」とあるは源氏物語の帖數で、現に五十四帖あるが、これは零本で原は六十帖であつたといふ說がある。また「十帖」は宇治の帖數、「夕顏」「浮舟」「蜻蛉」「紅梅」「竹河」「橋姫」「手習」「東屋」は皆源氏物語中の卷（帖）名である。相模入道千疋犬に「現か夢の浮橋の、繪合あこがれ參りたり」とあるも、夢を夢の浮橋といふて源氏物語の帖名をきかせ、また姫の名繪合に源氏物語の帖名をきかせて文を飾つたのである。

ゆめまくら　猿の一飛、夢枕（井筒業平）

〔夢枕〕相撲道絕（まくらぶ）十二手の一。「たちがん」を見よ。

ゆめみぐさ　夢見草よりその外は色見草とてあらばこそ（十二段）

〔夢見草〕櫻の異稱。二條良基撰・藏玉集に、「夢見草。櫻。うへ置きてたとへにやみる夢見草、あすを知らぬ今日の命を」。十二段のこのあたりの文は草の名害であつて、夢見を夢見草にいひかけたのである。

ゆめわけぶね　源五兵衞・おまん夢分舟（薩摩歌）

〔夢分舟〕夢路を分け行く舟の義。舟航中に夢を見ること。（延寶三年刊で、大阪及大阪附近の名所案内の本に蘆分船といふがある、これも難波の蘆を分け行く船といふ意の書名である）。

***ゆもと**　萬能の藥の湯元と聞くからに、四百四病は消えもせん（反魂香）

〔湯元〕溫泉の湧出る所。ここは紀州熊野湯の峰の鐵泉をいうたのである、湯の峰には光明湯、玉湯、小栗湯とある。小栗判官の塚から餓鬼の現はれたのを、上人が餓鬼阿彌と名付けて紀州熊野湯に浴せしめて、蘇生せしめたことは古淨瑠璃・小栗判官にも見えてゐる。

ゆや　三番過ぎて中入の、熊野より直にお行水（酒呑童子）

〔熊野〕謠曲名、この謠曲は俗に熊野・松風米の飯といいうて人人の好むものである。

湯屋の看板（ゆやかんばん）　末繁昌の藥の湯屋、末代までの看板と弓取直し軒口に、はたと當りの手ごたへし（鎌田）

往時湯屋の看板には弓矢を軒端に出したものである。蓋し「弓射る」を「湯に入る」にとつた謎であらう。このこと源爲朝にはじまつたやうに附會したのである。西川祐信畫・繪本答話鑑（享保十四年刊）卷下にも、湯屋に矢の看板を出してゐる畫が載つてゐる。

***ゆる**　あのさんの勘當がゆりて大阪へいなんしたら（大經師）　いやさ愚僧がゆりんと申さばこそ、人の勅勘免すに何かは苦しかるべきぞ（伊豆日記）

緩の義。許（ゆる）す、または許さるの意にいふ。「ゆりん」は「ゆり」に擬音「ん」の增加した詞である。井原西鶴撰・男色大鑑（貞享四年刊）卷五、涙の種は紙見世の條に、「彼の馬鹿者も其後はとがむる事なし、今は心もゆりてこれより衆道の緣となりて互に思を盡し」。

唯一（ゆいいつ）の神道　當社はもと唯一の神道なるに、この頃兩部聚合と名付け、眞言の法にて行ふは如何なる故ぞ（嵯峨天皇甘露雨）

唯一とは兩部に對して純粹の神道をいひ、兩部とは本地垂跡の說にもとづき、神佛二教の旨を合して一派を起したものをいふ。但し唯一神道としてもその實天台の教理儀式に據つたものが多い。また神佛儒の三教の旨を合したのを聚合といふ。

***ゆゐしき**　倶舍唯識維摩の學頭にて（女護島）

〔唯識〕法相宗・瑜伽宗等を唯識宗といふ。唯識宗義に通達した者に唯識の學頭の職を授ける。

***ゆゐしんのじやうど**　己心の彌陀・唯心の淨土なれば、心外無別法・卽身成佛（鰐丸）　此處も唯心の淨土と聞けば己心の彌陀、南無阿彌陀佛と十念もおりて里へぞ歸りける（賀古教信）

〔唯心淨土〕己心の彌陀と相對語。極樂淨土はただ我が一心に存すとの意。卽ち心の外に佛なく彌陀も己が心中の彌陀である。謠曲・春榮に「聲清光の彌陀の國の涼しき道ならば唯心の淨土なるべし」。

***ゆゐま**　倶舍唯識維摩の學頭にて（女護島）

〔維摩〕毘耶離城の長者である。識見高邁辯才縱橫で大乘の佛法を究め、屢佛弟子並に菩薩等を說破呵斥した。維摩居士が病に罹つた時に文殊菩薩見舞に來り、居士と問答し、進んで佛法の根本義たる不二法門に入るや、居士默して語らず、終に文殊と共に佛の說法してみられる庵維樹園に至り、ここに維摩の素性を語つてゐる經文を維摩經といふ。蓋し維摩の口を藉つて、小乘教を斥け、大乘佛經の眞理を提唱せしめたもので、維摩は假名、維摩經は佛滅後五百年頃に作られたものであらう。維摩經の教理に通達せるものに維摩の學頭の職を授ける。

ゆゐゑんそうぢ　法華唯圓總持の功德（本領曾我）

〔唯圓總持〕圓融無碍な唯一法門であつて、萬善の德を持し諸惡害を生ずしめないをいふ。

***ゆんで**　しやんとゆんでの腹に突立て、めてへくわらりと引廻し（宵庚申）

「ゆみて」（弓手）の音便。弓杖を「ゆんづゑ」といふ類である。弓を持つ方の手卽ち左手をいひ、「めて」に對す。